

博物館資料を視覚障がい者に伝える

群馬県立自然史博物館 教育普及係

1. はじめに

群馬県立自然史博物館は、常設展示資料およそ 3, 400 点、3 つの収蔵庫に約 16 万点の資料が保管されている。博物館の役割として、それら資料を調査・研究・保管することの他に多くの方に知っていただく普及活動がある。今年度、当館では一般財団法人 全国科学博物館振興財団による「全国科学博物館活動等助成事業」を請け、「視覚障がい者も楽しめる博物館の対応について」というテーマのもと、視覚障がい者来館対応プログラムの作成を行った。今回は、来館者対応を通して自然史を多様な県民に伝える取り組みをお伝えしたい。

2. 概要

視覚障がい者に博物館内で展示を楽しんでいただけるよう、県立盲学校の教職員や子ども達、また地域の視覚障がい者と連携を図り、よりよい博物館を目指し、展示方法やカリキュラム内容等を検討する。

3. 具体的実施内容及び方法

5 月 14 日 視覚障がい者と対談

視覚障がい者の実態把握、視覚障がい者からみた博物館について

6 月 11 日 神奈川県立生命の星・地球博物館へ視察

視覚障がい者向け対応について情報交換

6 月 21 日 視覚障がい児のための科学へジャンプ地域フォーラム 2015 へ参加

視覚障がい者による理科実験方法などについて知る

9 月 6 日 A 市身体障害者福祉会視覚部会 博物館展示室案内

視覚障がい者 8 名、介助者 8 名の団体に
展示案内を行い、改善点等の検討

9 月 18 日 群馬県立盲学校の公開授業に参加

午前（小・中学部） 午後（高等部）

11 月 11・12 日 群馬県立盲学校で移動博物館を実施

・資料 100 点あまりを展示・解説
・自作教材で盲学校教員と T T 授業

11 月 11 日 T 市視覚障がい福祉協会 博物館展示室案内

視覚障がい者 10 名、介助者 6 名の団体に展示案内を行い、改善点等の検討

12 月 視覚障がい者向け解説プログラムの検討

2 月 視覚障がい者向け解説プログラム「本物に触れる 60 分ツアー（仮）」
の実施（予定）

2 月 解説プログラム実施説明のチラシを作成・配布（予定）



4. 調査方法

ステレオICレコーダー（SONY ICD-TX650）により、会話を記録し、それを分析

5. 調査結果

○県立盲学校での移動博物館参加者の声

・キツネがヤマドリを食べているのはく製があったけど、牙が刺さっていた。ムシヤムシヤとは食べていなかった。

・（キリンの頭骨を触った後、柴犬のはく製を触りながら）キリンって首が長いのは知っているけど、大きさは、この柴犬より大きい？

○展示室案内を終えた視覚障がい者からの声

・ブナ林コーナーは、他の展示室場所とは違って林の中という感じがした。

・タヌキやキツネのはく製に触ったが、毛の性質がそれぞれ違っていた。

・博物館には、点字表記が少ない。それぞれの資料の名前だけでなく説明文もほしい。

・1時間はあっという間に過ぎてしまった。もう少し長くてもよい。

○展示室案内を終えた視覚障がい者の介助者からの声

・解説者の人数にも制限あると思うが、1人が説明するのであれば障がい者8名というのは無理がある。介助者も含めると16名に案内することになる。

・いろいろな公共施設をまわるが、視覚障がい者向けの解説というのは少ない。博物館には触れる展示も多く良かった。

6. 考察

県立盲学校での移動博物館参加者の声には、「牙が刺さっている」というのがあった。全体を触って知るだけではなく、隅々まで触るため、晴眼者が気づかないような細かいところまで気づいていた。また、晴眼者の視線から「ヤマドリをくわえている」を「食べている」と説明してしまった点や中学生に当然キリンの大きさを知っているだろうということの前提で話しを進めていた点で「柴犬より大きい？」と言う質問が出たことなどから、視覚障がい者側に立ったきめ細かな解説が必要とされることが分かった。また、展示室案内を終えた視覚障がい者からは、展示室でなくては味わえない空間の空気を感じてもらえた。また、たくさんの資料を触り、比較しながら観察してもらえた。介助者からは、触れる資料をメインに解説があったことを評価された。

今まで、当館では、視覚障がい者の団体には、実験室に触れる資料を特別に準備し、解説を行ってきた。しかし、今回の試みで展示室でも晴眼者と同様に楽しんでもらえることが分かった。

7. まとめ

今後、視覚障がい者向けの解説を積極的に行い、データを蓄積し、より楽しむことのできる博物館を心掛けたい。

キーワード：自然史博物館・視覚障がい者・解説・触れる展示・博学連携